

宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2005年度

宇陀市文化財調査概要 1

2007

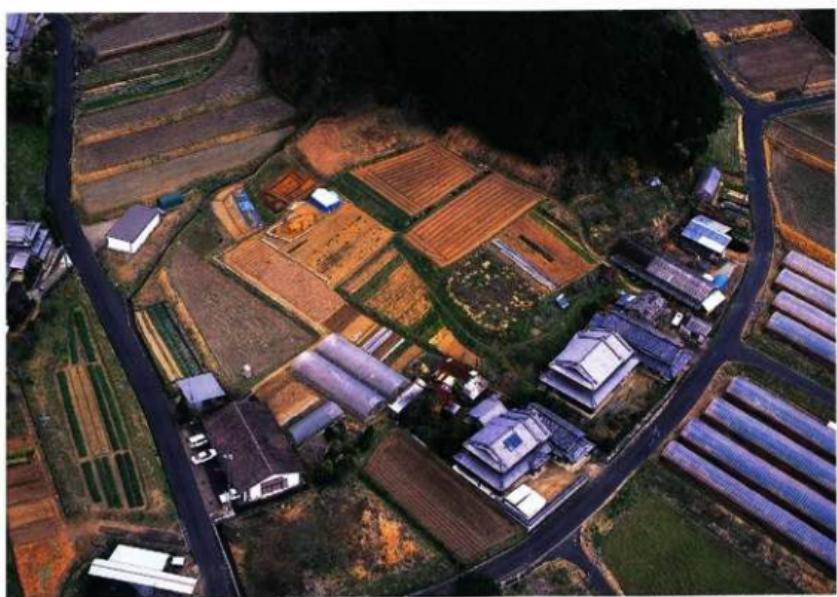
宇陀市教育委員会

宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2005年度

宇陀市文化財調査概要 1

2007

宇陀市教育委員会



航空写真（南西上空から）



航空写真（西上空から）



整地土<第3層>内遺物出土状況（南西から）



整地土<第3層>内遺物出土状況（西から）

例　　言

- 1 本書は、平成17（2005）年度に宇陀市教育委員会（旧榛原町教育委員会）が国庫補助事業・県費補助事業として実施した「宇陀市内遺跡」（旧榛原町内遺跡）の発掘調査概要報告書（宇陀市文化財調査概要　1）である。
- 2 発掘調査（現地作業及び整理作業）は、平成17（2005）年4月11日に着手し、平成18（2006）年3月31日に終了した。なお、本書の刊行は、平成18（2006）年度事業として実施したものである。
- 3 平成18（2006）年1月1日で榛原町、大字陀町、菟田野町、室生村が合併して宇陀市となったが、従来の業務を引き続いて行っており、本書には、「宇陀市内遺跡」の調査成果の一部を収録している。
- 4 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、榛原町教育委員会生涯学習課（現　宇陀市教育委員会社会教育課）主任　柳澤一宏が担当した。
- 5 調査組織及び関係者は、「I 埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。
- 6 測量図及び造構図の方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いているが、一部には磁北（M. N）も使用している。なお、平成14年4月1日施行の測量法改正により、測量の基準が日本測地系から世界測地系になっているが、本書では、これまでの遺跡測量成果等の都合上、日本測地系によっている。
- 7 土層の色調は、「新版標準土色帖」2000年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 8 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、宇陀市教育委員会において保管している。
- 9 本書の執筆・編集は、大字陀地域教育事務所　地域教育課　辻本宗久の協力のもと、柳澤が行った。

目 次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要	1
1 埋蔵文化財発掘調査等の概要	
2 調査組織等	
II 位置と環境	4
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 松牧高倉遺跡第1次発掘調査概要	7
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
IV 福地所在遺跡第1次発掘調査概要	12
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
V 下城・馬場遺跡第11次発掘調査概要	17
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	

図版
報告書抄録

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

1 埋蔵文化財発掘調査等の概要

宇陀市内では、1960年代後半以降、土木工事等の開発行為の増加に伴い、生活環境をはじめ、地理的環境・歴史的環境も大きく変化してきている。土木工事等の開発行為の増加とともに埋蔵文化財の発掘調査も市内各所で行われ、周辺の山野とともに大きく景観を変え、その姿を消している。

このような状況のもと、榛原町教育委員会と大宇陀町教育委員会では、町内遺跡の詳細分布調査を実施し、いわゆる「遺跡分布地図」の整備をはかってきたところである。2006年1月に榛原町、大宇陀町、菟田野町、室生村が合併して「宇陀市」が誕生し、従来の業務を引き続いて行うこととなったが、遺跡分布調査が不十分な地域があることから、基礎資料の再整備が必要となってきている。今後も市内各所で開発行為が計画・実施されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、「遺跡分布地図」をもとに事業者等とその都度、協議を重ねているところである。

2006年1月～3月にかけて宇陀市教育委員会が取り扱った埋蔵文化財発掘届・通知、発掘調査等の件数は表1のとおりである。また、2005（平成17）年度に旧榛原町教育委員会、旧大宇陀町教育委員会、宇陀市教育委員会が実施した発掘調査・工事立会は表2・図1のとおりである。

本書には、2005（平成17）年度に国庫補助事業・県費補助事業として実施した事業のうち、桧牧高倉遺跡（1次調査）、福地所在遺跡（1次調査）、下城・馬場遺跡（11次調査）の発掘調査概要を収録している。なお、下城・馬場遺跡は発掘調査が途上にあるため、その一部を登載しているにすぎない。



写真1 宇陀市の市街地（1995年）

表1 2005（平成17）年度発掘届・発掘調査件数等一覧表 <宇陀市 2006年1月～3月分>

遺跡有無確認合計	埋蔵文化財発掘届（民間）	埋蔵文化財発掘通知（公共）	埋蔵文化財発掘届・通知合計	発掘調査（市担当）	工事立会（市担当）	調査件数合計
0	3	1	4	3	1	4

種別	摘要	遺跡名	所在地	調査原因	事業主体	工事面積（m ² ）	措置等
埋蔵文化財発掘届（民間）	福地所在遺跡	榛原区福地777、778-1	個人住宅建設工事	岸本貞治	742.99	2006年2月 宇陀市 発掘調査	
	中西遺跡	榛原区下井尾1375-1、1375-2の一部	個人住宅建設工事	藤村重賀	1153.56	2006年4月 宇陀市 発掘調査	
	清水谷遺跡	椎原区あかね台2-21-6	個人住宅建設工事	上田浩司	199.20	2006年4月 宇陀市 工事立会	
埋蔵文化財発掘届（公共）	仮称 大野古墓葬地	室生区大野	道路改良工事	奈良縣大宇陀 土木事務所	250.00	2006年7月 宇陀市 工事立会	

表2 2005(平成17)年度発掘調査等一覧表<旧桂原町、旧大字陀町、宇陀市>

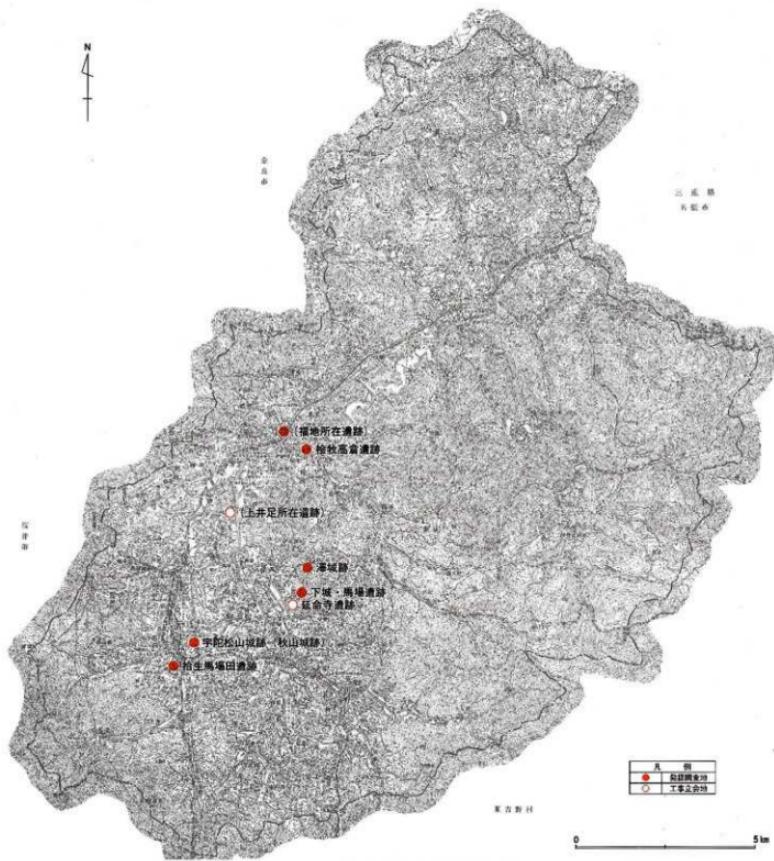


図1 2005(平成17)年度調査遺跡位置図

2 調査組織等

2005年度の現地調査及び2006年度の整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

2005（平成17）年12月31日まで

事業主体 榛原町教育委員会

総括 教育長 田村義治

庶務 事務局長 小西千恵

生涯学習課

次長 中村好三（生涯学習課長事務取扱）

課長補佐 合田憲二

主事 杉本昌之

調査主任 柳澤一宏

2006（平成18）年1月1日から

事業主体 宇陀市教育委員会

総括 教育長 岸岡寛式

庶務 事務局長 中田進

参考事 西岡博文（4月1日～9月30日）

社会教育課

課長 中井富一

主幹 大西茂（～9月30日）、山本富男（10月1日～）

課長補佐 藤本都志枝（～3月31日）、高山みどり、合田憲二（4月1日～）

調査主任 柳澤一宏

検牧高倉遺跡（1次調査）

補助員 打越真弓、太田保美、筒井郁子、松浪智美、松本千恵、山崎充代、川田晶一、

石井良憲、乾尊彦、前田渉、松元章徳

指導・助言 奈良県教育委員会

協力 山本国雄、山本美恵子、榛原町建設課（当時）、㈱ワールド、㈱アルカ

福地所在遺跡（1次調査）

補助員 松浪智美

指導・助言 奈良県教育委員会

協力 岸本真治、松塚建設物、榛原町建設課（当時）

下城・馬場遺跡（11次調査）

補助員 打越真弓、太田保美、筒井郁子、日野原祥子、松浪智美、松本千恵、山崎充代、

川田晶一、石井良憲、乾尊彦、前田渉、松元章徳

作業員 榛原栄子、大門建夫、大門静

指導・助言 奈良県教育委員会、辻本宗久

協力 砥出嘉信、佐藤右文、沢自治会、㈱ワールド

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、宇陀市(大宇陀区、株原区、菟田野区、室生区)、曾爾村、御杖村からなる。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」と総称され、宇陀市の西半がこの口宇陀に含まれている。

口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称されている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

宇陀郡の四周はほとんどが山に囲まれており、東が三重県へと続く高見山地、西が大和盆地と宇陀とをわける音羽山、龍門岳などが連なる龍門山地となっている。南は吉野と接し、関戸峠を越えると紀伊半島を東西に走る中央構造帯を流れる吉野川流域へと至る。北は五条から桜井、株原を経て伊賀へと続く近江・伊賀大断層と呼ばれる構造谷が認められる。この構造谷の北側は急傾斜の断層崖となっており、大和高原とをわける額井岳(通称大和富士)、香醉山、貝ヶ平山、鳥見山などの山々が屏風状に形成され、宇陀の地を見下ろしている。

口宇陀を流れる主要河川は、西から順に宇陀川、芳野川、内牧川があり、これらは小盆地、谷部を蛇行しながら他の小支流をあわせ、宇陀市株原区でさらに広い宇陀川となる。その後、宇陀川は室生川をあわせて北東へと流れ、三重県へ至って名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へとそいでいる。口宇陀の西には龍門山地が横たわるため、これが奈良盆地との分水界となっており、大和川流域とは水系を異にしている。この宇陀川の本流は大宇陀区宮奥の谷に発し、黒木川、本郷川、中山川などの小支流をあわせて、株原区へと至っている。一方、関戸峠を越えた大宇陀区大蔵、栗野などの地区は吉野川の支流である津風呂川の上流域となっている。芳野川は菟田野区岩端を源とし、宇太水分神社の南を流れ、株原区下井足で宇陀川と合流する。芳野川流域と吉野川流域との分水界は、現在も市村界でもある佐倉峠の山系となっている。また、宇陀川と芳野川との間には吉野の山塊から延びてくる標高320~430mの丘陵が横たわり、これらの尾根稜線を境として、現在の大宇陀区と株原区、菟田野区との行政区画としている。

これらの地形に沿って古くから様々な交通路が発達し、宇陀地方は大和と伊賀、伊勢そして東国とを結ぶ重要な役割を果たしている。現在の主要交通路は、近江・伊賀大断層沿いの桜井市朝倉、初瀬、株原区萩原、山辺三、室生区大野を通る国道165号線や近鉄大阪線となっており、かつては、伊勢街道(初瀬街道)、青越道などと呼ばれた道である。現在、株原区の市街地が行政・交通の中心的な役割を担っているが、この様相は鉄道が開通した近代以降のことであり、近世以前にはいくつもの道が宇陀を縦横に走り、それぞれが重要な位置を占めていた。

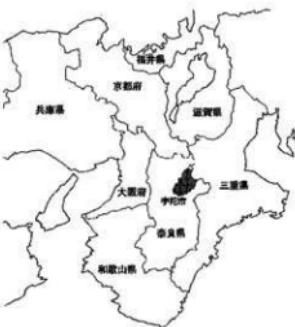


図2 宇陀市位置図

奈良盆地と宇陀とを結ぶ道は、北から西峠、女寄峠、半坂の小峠、上宮奥の大峠を越えるルートが知られており、桜井市忍坂、栗原の谷部を経て小峠を越える半坂越が中心的な役割を果たした。西峠越が国道165号線、女寄峠越が国道166号線となって現在も主要道としての役割を担っている。また、口宇陀を縦断するかのように南北にいくつもの主要道が走り、北へとすると榛原を通る伊勢街道を横断し、香醉峠を経て奈良市都祁町などが位置する大和高原へと至る。南の関戸峠や佐倉峠を越えると、もうひとつの伊勢街道（高見越）へと通じ、関戸峠を越えた三茶屋から南は東熊野街道にもつながる。東への道は青越道のほかに、石割峠を越える伊勢本街道、現在は国道369号線となっている開路・梅坂峠を越えるルートなどがある。

口宇陀には縱横、東西南北の各方面に触手のように道がのび、「壬申の乱」の際、大海人皇子の一行が吉野から宇陀を経て、伊賀へと進んでいったことからも明らかのように、この地域は交通の要衝とし重要な位置を占めている。これら、古代からの道は、国道、県道、市道等に姿を変えているものの、今もその占める役割は変わらない。

2 歴史的環境

宇陀地方、なかでも口宇陀地域には縄文時代以降、各所で多くの人々が生活を行い、その痕跡が「遺跡」となって、今の我々に、様々なことを教えてくれる。また、宇陀地方は、「古事記」、「日本書紀」をはじめとする多くの文献にも度々登場し、今に伝える地名、伝承等も多い。

これまでに、宇陀郡内では4点の有舌尖頭器が出土しており、うち、3点が榛原区内から出土している。これらは、縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀地域の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡や坊ノ浦遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次の古墳時代へと継続するものが多い。この時期の遺跡の特徴として、竪穴式住居跡等を設ける低丘陵上遺跡の出現をあげることができ、能峠北山遺跡、平尾東遺跡、五津・西久保山遺跡、五津・峰畑遺跡、大王山遺跡、福地城遺跡などでは、後期から古墳時代初頭に属する住居跡が確認されている。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓（区画墓）は、これまでに黒木西城跡、胎谷古墳、蓮華山遺跡、見田・大沢古墳群、野山遺跡群、大王山遺跡、下井足遺跡群、能峠遺跡群、平尾東古墳群、西久保山遺跡、キトラ遺跡などで確認されている。弥生時代後期の集落としては、高塚遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、古墳時代の集落としては、先の遺跡のほか、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、谷遺跡、石榴垣内遺跡、坊ノ浦遺跡などがあり、谷部を流れる川跡や竪穴住居跡などが確認されている。

古墳時代前期から中期の古墳は、鴨池古墳、北原西古墳、北原古墳、谷畑古墳、古市場古宮谷1号

墳、シメン坂1号墳、高山1号墳、前山1号墳などが発掘調査によってその存在が明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、口字陀地城の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀中葉から後葉に出現していく古墳群は、後出古墳群、野山古墳群、大王山・篠塚古墳群などがある。野山古墳群・後出古墳群からは、多量の鉄製武器・武具などが出土しており、宇陀地方では数少ない軍事的色彩強い要素を含んだ古墳群となっている。その後、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、6世紀第2四半期の谷脇古墳を先駆けとして、丹切古墳群、能峰古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめとした多くの横穴石室墳が築造されることとなる。また、上井足フ巴拉古墳の埋葬施設は竪穴系横口式石室が確認され、神獸画像鏡が出土した近傍の愛宕山古墳も同様の埋葬施設と考えられる。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌、銅箱、金銅製外容器、ガラス製骨蔵器の出土品は国宝となっている。このほか、凝灰岩製外容器内から銅製骨蔵器が出土した拾生火葬墓、2枚の鐵板と木炭に包まれた須恵器が出土した岩尾火葬墓がある。

寺院では、「女人高野」の別名がある室生寺が知られているところであるが、古代寺院跡では、安楽寺跡（駒帰廃寺）の全容が明らかとなっている。金堂と考えられる礎石建物遺構とその東側にも礎石建物遺構が検出され、奈良時代初頭に創建、平安時代中頃に焼失したことが明らかとなっている。このほか、小附廃寺、小附大谷遺跡、サンジョーポ遺跡からも瓦が出土している。

古代末には、宇陀においても莊園の開発が急速に進み、坊ノ浦遺跡や高井遺跡では、掘立柱建物跡や素掘溝などを確認している。この頃から台頭してくる地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が發展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・澤氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、澤城、芳野城をそれぞれの居城としていた。

宇陀松山城跡（秋山城跡）は、中世から近世初頭にかけての宇陀地方の中核的な城郭と城下のあり方を知る上で欠くことのできないもので、その眼下には、城下町が広がる。松山伝統的建造物群保存地区と呼称するこの地区は、近世城下における商家町から在郷町として發展し、近世から昭和前期までに建てられた意匠的に優れた町屋をはじめ土蔵や寺社などの建築群、石垣や水路などが一体となって歴史的景観を今日によく伝えることから重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

参考文献

- 奈良県教育委員会 1975 「宇陀・丹切古墳群」
- 椿原町教育委員会 1977 「大王山遺跡」
- 奈良県教育委員会 1986 「能峰遺跡群」 I
- 奈良県教育委員会 1988 「野山遺跡群」 I
- 奈良県教育委員会 1991 「高田堀内古墳群」
- 宇陀古墳文化研究会 1993 「大和宇陀地域における古墳の研究」
- 大宇陀町教育委員会 2002 「宇陀松山城（秋山城）跡」（遺構編）

III 桧牧高倉遺跡第1次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

家屋の解体中に瓦器、土師器、陶器、錢貨、鉄釘などが出土したため、発見者が榛原町教育委員会に連絡ことに端を発し、改めて本遺跡の存在が明らかとなったものである。

その経緯と経過は、次のとおりである。

平成17年（2005）4月1日 遺物発見の連絡をうけ、榛原町教育委員会が現地確認

平成17年（2005）4月6日付け 遺跡発見届の提出（発見者→榛原町教育委員会）

平成17年（2005）4月7日付け 遺跡発見届の進達（榛原町教育委員会→奈良県教育委員会）

平成17年（2005）5月24日付け 遺跡発見の通知（奈良県教育委員会→榛原町教育委員会）

平成17年（2005）6月1日付け 遺跡発見の通知（榛原町教育委員会→発見者）

この遺物発見地において、個人の宅地造成工事が計画されているため、遺跡発見の事務手続きとともに埋蔵文化財発掘届の提出を求め、2005年6月7日に同届が提出された。早速、関係機関等が遺跡の取扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、榛原町教育委員会において発掘調査を担当することになった。現地調査は、2005年6月8日から同年7月7日まで断続的に行った。

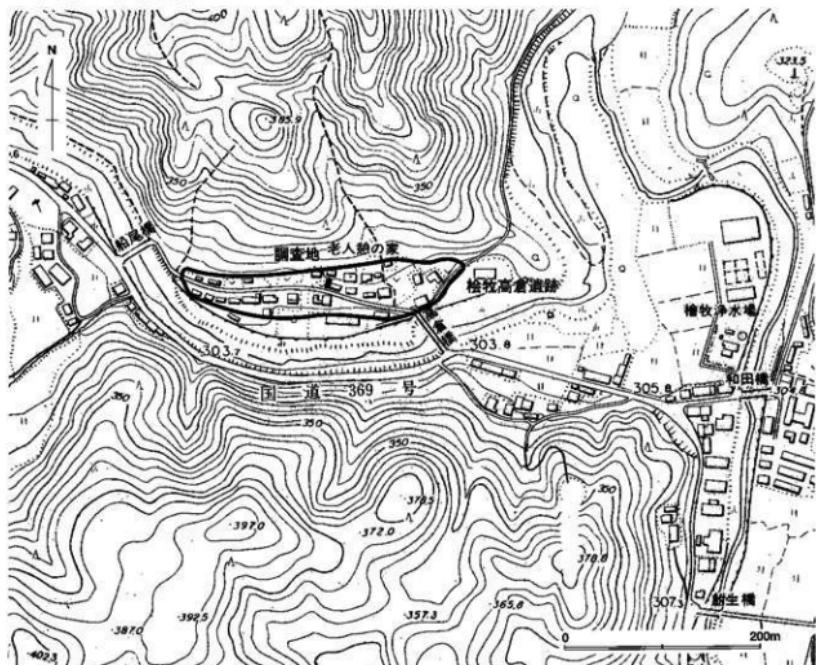


図3 桧牧高倉遺跡位置図

なお、本遺跡名は大字名と垣内から「桧牧高倉遺跡」とし、現地調査終了後の平成18年（2006）4月20日付けで本遺跡の異動届を奈良県教育委員会へ提出し、平成18年（2006）5月12日付けで奈良県教育委員会から「奈良県遺跡地図の記載変更について」の通知があった。

2 位置と環境

桧牧高倉遺跡は、株原町の市街地の東方約3kmにあり、宇陀川左岸の標高約303m～310mの河岸畠地に位置する。河岸段丘の大半は住宅等の開発が進んでおり、旧形を保つ箇所が少なくなっている状況にある（図3・4、図版1）。この河岸段丘では、昭和前半頃までは、石器等が採集されていたようである。^{既往}

調査地は、この河岸段丘のほぼ中央、標高約306.7mの住宅地内にある。

3 遺跡の調査

（1）調査区と基本層序

工事予定地の北半部分において、南北方向に長さ約3.7m、幅約1mのトレンチを設定した（図5、図版2）。基本層序は、東壁での基本土層は、第1層が硬く締まった土間粘土（暗褐色粘土）、第2層が暗褐色土、第3層が黒褐色土、第4層が褐色粘質土の地山となっている（図6）。

（2）検出遺構

北から南へと緩やかに傾斜する地山面を検出したが、調査範囲が狭隘なこともあり、明確な遺構は確認していない。

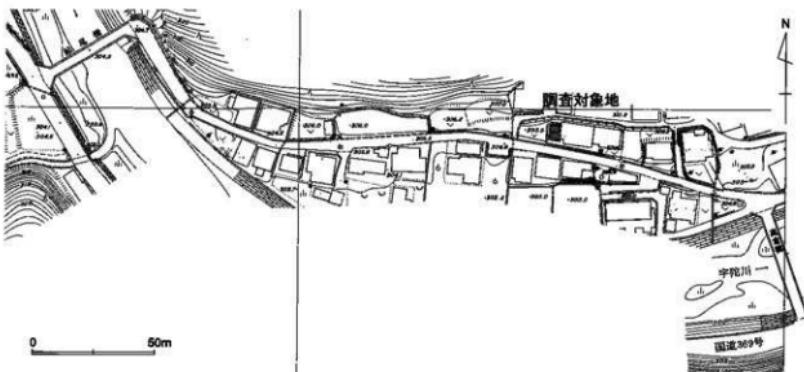


図4 桧牧高倉遺跡調査位置図（1）

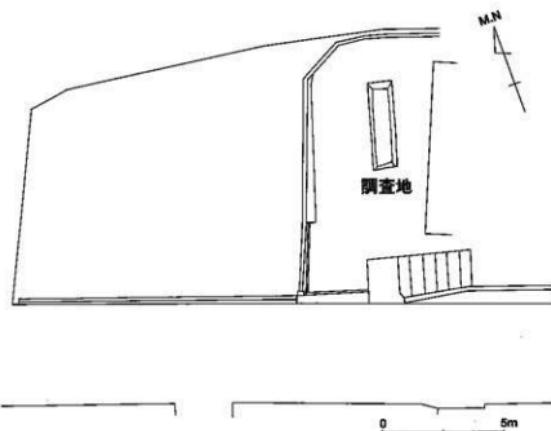


図5 案内高倉遺跡調査位置図（2）

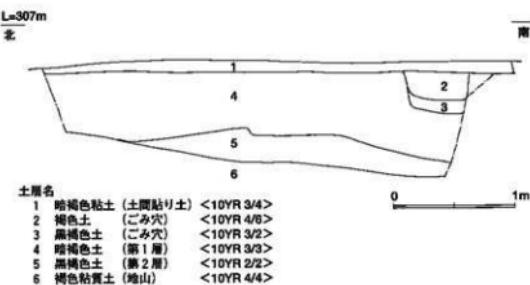


図6 案内高倉遺跡土層断面図

(3) 出土遺物

第1層の整地土から石鐵、碧玉片、須恵器、瓦器、土師器、陶器、磁器、土製品、鉄釘などが出土している。また、遺跡発見の契機となった採集遺物には、整理袋1袋分の瓦器、土師器、陶器、錢貨（寛永通宝）などがある。

土器（図7）

須恵器（壺）、瓦器（椀）、土師器（皿、焙烙）、磁器（碗、皿）などが出土しているが、その大半が小片である。

須恵器は、壺の体部片（1）で、摩滅が著しいが、外面は格子ふう叩目文、内面には同心円文が認められる。灰色を呈し、焼成は堅緻である。詳細な時期は明らかにできない。

瓦器椀は、小片のため図示していないが、12世紀前葉～中葉の年代と推定される。

土師器のうち、焙烙（2）を図化し得た。口縁部は比較的長く、外側に開いて立ち上がる。口縁下

半には突帯を有する。内面は、にぶい黄橙色を呈し、外面には煤が付着している。出土している焰烙片は、18世紀前葉～後葉に比定できる。

磁器は、染付磁器が大半を占め、先の焰烙と同様、18世紀の所産と考えられる。

石器（図8）

サヌカイト製の石錐（凹基錐）で、長さ21mm、幅16.5mm、厚さ4.9mm、重さ1.2gをはかる。

銭貨（図9）

銅製の寛永通宝（古寛永銭）で、径23mm、厚さ1mmをはかる。採集資料である。

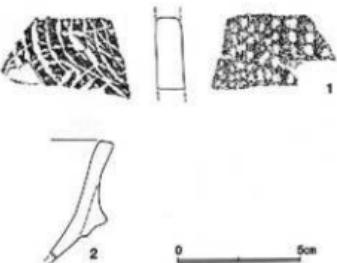


図7 桧牧高倉遺跡出土土器実測図

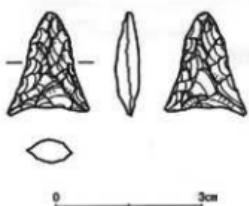


図8 桧牧高倉遺跡出土石器実測図

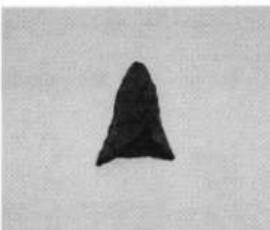


写真2 桧牧高倉遺跡出土石器



図9 桧牧高倉遺跡出土銭貨実測図



写真3 桧牧高倉遺跡出土銭貨

4 まとめ

第1層を中心に縄文時代、古墳時代、中世～近世の遺物、また、現代の産物が出土している。このことから、近代及び現代に調査地周辺の土地の改変が大きくなされたと考えられ、周辺の土砂をもつて現地形が形成されているものと推定できる。出土遺物から本遺跡は、縄文時代以降、断続的に営まれた集落の可能性も考えられるが、その詳細は現段階では、明らかにできない。

5 抄 錄

遺 跡 名 桧牧高倉遺跡

調 査 地 奈良県宇陀市樅原区桧牧2159番地

遺 跡 規模南北約 30m～50m、東西約 270m

種 別 縄文時代、古墳時代、中世、近世の遺物散布地

調 査 主 体 樅原町教育委員会（当時）

調査担当者 樅原町教育委員会 生涯学習課 主任 柳澤一宏（当時）

調 査 原 因 個人の宅地造成工事（事業者：山本国雄）

現地調査期間 2005（平成17）年6月8日～2005（平成17）年7月7日

調 査 面 積 4 ml

検 出 遺 構 なし

検 出 遺 物 石器、碧玉片、須恵器、瓦器、土師器、陶器、磁器、土製品、鉄釘

<整理箱2箱>

資料等の保管 宇陀市教育委員会

調査後の措置 工事実施

註

1) 島本 一 1937 「内牧石器時代遺跡とその遺物について－山岳遺物の特殊性－」『大和志』第4巻第4号 大和国史会

2) 松本洋明 1988 「十六面・薬王寺遺跡」 奈良県立橿原考古学研究所

3) 藤山 洋 1999 「大阪の土師質土器」『関西近世考古学研究』Ⅶ 関西近世考古学研究会

4) 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の百年」



写真4 桧牧高倉遺跡とその周辺（1998年）

IV 福地所在遺跡第1次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

本遺跡は、弥生時代、中世の遺物散布地で、「奈良県遺跡地図番号12-D-33」として登載されているところである。2000年の工事立会では土師器、2005年の工事立会では瓦器、土師器が出土しているが、工事立会面積が狭隘なこともあり、明確な遺構は検出していない（図11）。

2000年の工事立会地の東方（下方）の住宅地内において、個人住宅の新築工事が計画され、2006年2月には埋蔵文化財発掘届が提出された。その後、関係機関等が遺跡の取扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、宇陀市教育委員会において調査を担当することとなり、現地調査を2006年2月17日、3月28日に実施した（図版3）。

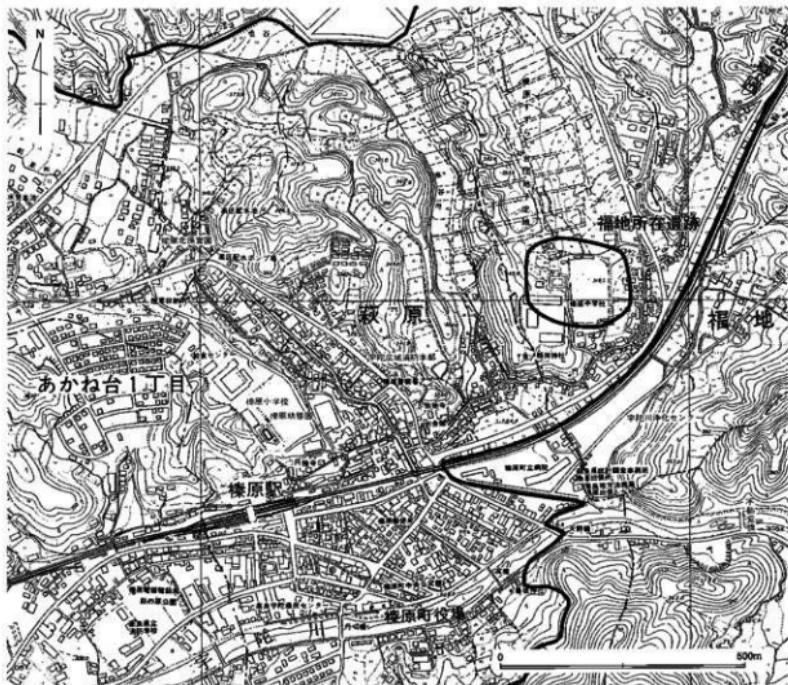


図10 福地所在遺跡位置図

2 位置と環境

福地所在遺跡は、株原の市街地の東辺に位置し、標高約312~330mの尾根上、谷部に広がる。遺跡の南辺には、大和と伊勢とを結ぶ「伊勢街道（青越道）」が通り、現在は、国道165号線と国道369号線とのが分岐する交通の要衝にある。遺跡の北隣には、福地城跡（中世）や奥ノ芝古墳群（古墳時代）などが位置する（図10・11、写真5）。



3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序

工事予定地（面積：約111m²）のうち、建物建設地の南辺部分に東西方向のトレンチ（長さ約12m、幅約1m）を設定し、遺構・遺物の検出につとめた（図12、図版4）。

基本層序は、トレンチの西端では、第1層がにぶい黄褐色（整地土）、第2層が褐色土、第3層が灰褐色の地山となっている。

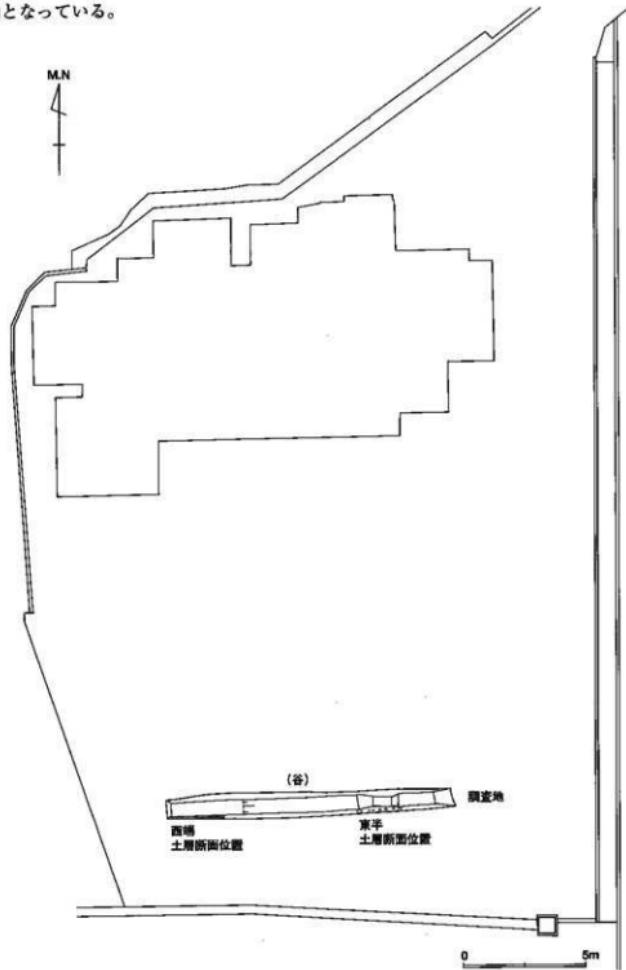


図12 福地所在遺跡調査位置図（2）

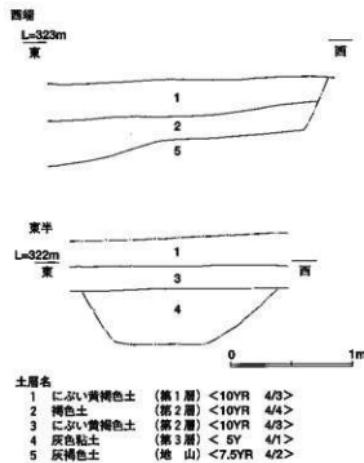


図13 福地所在遺跡調査土層断面図

一方、トレンチの東半では、第1層がにぶい黄褐色の整地土、第2層がにぶい黄褐色土上、第3層が灰色粘土である。第3層の灰色粘土は、谷の堆積土と思われ、本来、東半部分は、谷地形を呈していたと推定される。(図12-13、図版4)

掘り下げは、建物基礎との関係から、必要以上に行っていないため、詳細な谷の堆積土の状況等は、明らかにできない。

(2) 検出遺構・出土遺物

各層において遺物、西端の地山面において遺構の検出につとめたが、明確な遺構・遺物は認められなかった。また、その後の工事立会においても、遺物は出土していない。

4 ま と め

地山面において遺構の検出につとめたが、これを明確には検出できなかった。また、調査地の東半は、谷の堆積土と思われ、明確な遺構は認められない。現段階では、谷地形の詳細な復元は困難な状況にある。

本遺跡は、過去の開発行為が著しいため、旧地形をとどめている箇所は少なく、今後も発掘調査や工事立会を重ね、旧地形の復元も必要な遺跡である。なお、本遺跡の範囲が広範囲に及ぶことから小字等をとって遺跡名とすることが現段階では困難なため、福地所在遺跡と仮称しておく。

5 抄 錄

遺 跡 名 仮称 福地所在遺跡 <奈良県遺跡地図番号 12-D-33>

調 査 地 奈良県宇陀市株原区福地777, 778-1番地

遺跡立地 標高約312~330mの尾根上、谷部
遺跡規模 南北約250m、東西約250m
種別 弥生時代、中世の遺物散布地
調査主体 宇陀市教育委員会
調査担当者 宇陀市教育委員会 社会教育課 主任 柳澤一宏
調査原因 個人住宅建設工事（事業者：岸本真治）
現地調査期間 2006年（平成18）2月17日、3月28日
調査面積 12m²
検出遺構 なし
検出遺物 なし
資料等の保管 宇陀市教育委員会
調査後の措置 明確な遺構が認められないため、工事実施



写真5 棚原駅周辺の市街地（1985年）

V 下城・馬場遺跡第11次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

下城・馬場遺跡は、澤城跡から南方へ派生する尾根筋とその間を流れる小支流によって形成された小規模な谷地形の先端部の一角を占めている（図14、図版5）。古くから澤城の下城といわれ、現在も小字名に「下城」や「馬場」などといった呼称が残っている。

1984年度には「沢集落センター」建設に伴う発掘調査（1次調査）を行い、縄文時代～弥生時代、中世（12世紀～13世紀）の遺構・遺物を検出している。その後、遺跡高所の平坦面において個人による土地改良工事が計画されたため、1993年度に2次調査、1994年度に3次調査、1997年度に4次

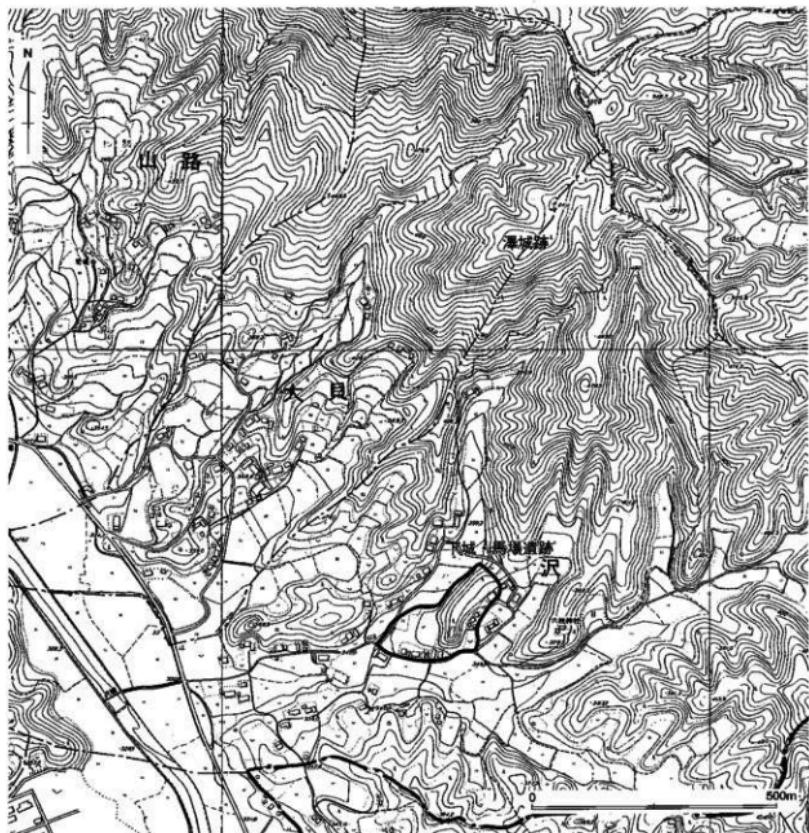


図14 下城・馬場遺跡位置図

調査を実施し、15世紀～16世紀の礎石建物等の遺構をはじめ、多くに遺物を検出し、中世の館跡の一端を明らかにできた。

これらの発掘調査によって、下城・馬場遺跡は、宇陀地域における有力中世武士団のひとりである「澤氏」の城館跡（居館跡）であることが明らかとなつたことから、さらにその状況等を解明する範囲確認調査を計画し、1998年度に地形測量等（5次調査）、1999年度には、遺跡南西隅部分の遺構・遺物の状況を明らかにする6次調査を実施し、2000年度には、6次調査地の北隣において7次調査を継続し、あわせて東尾根の地形測量も行った。2001年度には、2～4次調査地北側の遺構の有無などを明らかにすることを目的とした確認調査（8次調査）を実施した（写真8）。

2003年以降、個人による農地改良工事に伴う事前の発掘調査を実施（9次・10次調査）しており、今次で11次を数える（図15）。発掘調査（現地調査）は、2005年（平成17年）7月21日～2006年（平成18年）3月28日にかけて断続的に行ったが、多くの遺物が出土しているため、その検出作業に難渋し、次年度に発掘調査を継続することとした（写真6・7）。

2 位置と環境

下城・馬場遺跡は、尾根稜線から西斜面、標高約339m～370mの一角を占めており、芳野川が流れる西方への眺望が比較的良好で、遠く、宇陀地域の代表的な中世山城である秋山城跡（近世初頭には宇陀松山城）を望むことができる。

また、北方には澤城跡や伊那佐山を仰ぎ見ることができる。下城・馬場遺跡の中心は尾根の西斜面に広がり、4段にわたる平坦面が形成されている。遺跡の現状は大半が畠地や水田、山林、周縁部は宅地となっている。

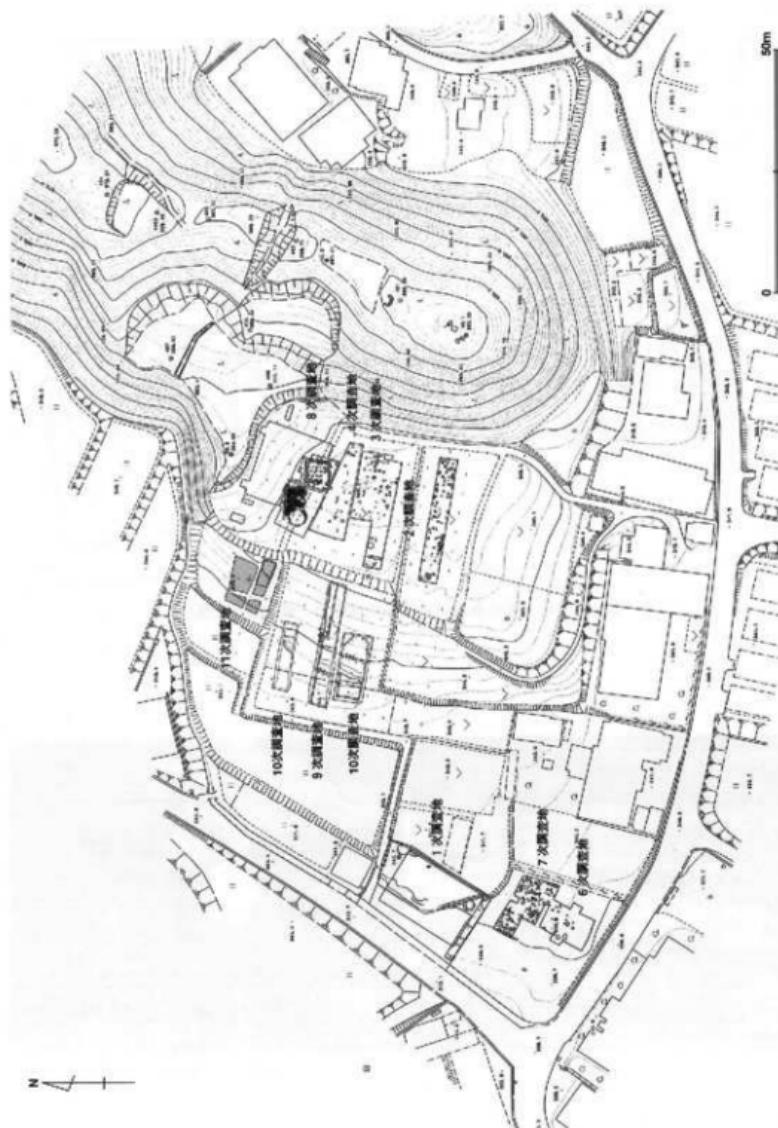
この遺跡の周辺は绳文時代～中世の沢遺跡、弥生時代～中世の延命寺遺跡、古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が集中している地域でもある。

3 遺跡の調査

今回の発掘調査では、9次調査時に多くの遺物が出土した9-2トレンチの遺物の埋蔵状況を明らかにするため、この調査区を拡張して、11次調査地とした。

第1層（耕作土）、第2層（流土等）を除去すると、多量の遺物を含む整地土（第3層）を検出した（図16）。整地土は、上方から土砂・遺物が交互に傾斜をもって堆積している状況が見える。整地土中の遺物は、少なくとも3回にわたって、上方からの投棄された状況がうかがえるが（図版6）、2005年度は、整地土上面での遺物検出にとどまっている。2006年度は、多量の遺物の検出・取り上げ作業等を行っているが、その作業は途上である。出土している瓦器碗は、12世紀中葉から13世紀後半の時期のものが大半を占めるが、土器を中心とする遺物の投棄時期については、今後の発掘調査の進展によって明らかにしたい。

図15 下城・黒堀酒類検査位置図



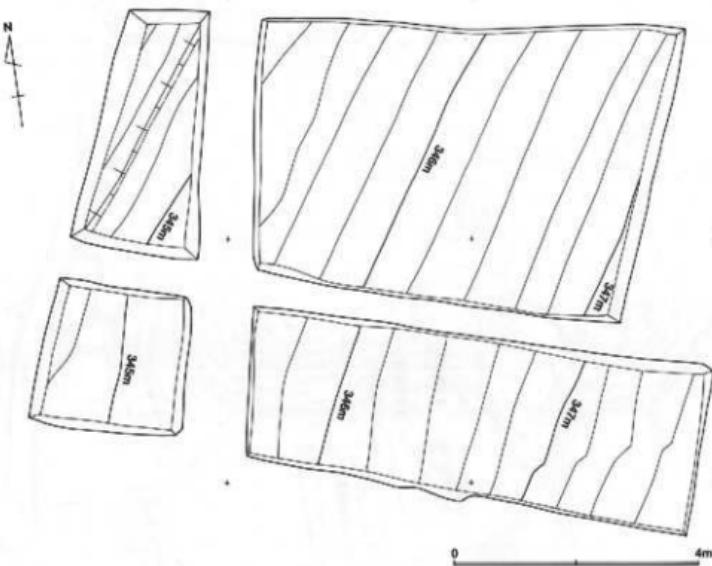


図16 下城・馬場遺跡11次調査地測量図（第3層検出面）



写真6 作業風景（1）



写真7 作業風景（2）

4 まとめ

9・10次調査と同様、上段の居館焼失に伴う片付けによって、土砂、遺物などを西斜面へ投棄した状況がうかがえ、これが結果的に整地土となっており、地形の傾斜によった斜めの堆積状況を示している。整地作業終了後、館の西側に幅約5~6m、深さ1.5m以上の堀を穿っているが、この堀は、現在の土地形状に比較的一致し、南北方向に埋没しているものと推定される。

なお、堀の造営は14世紀中葉以降、堀の埋没（埋め立て）は16世紀後葉頃と現段階では考えている。これが澤氏の居館の終焉とも考えられる。

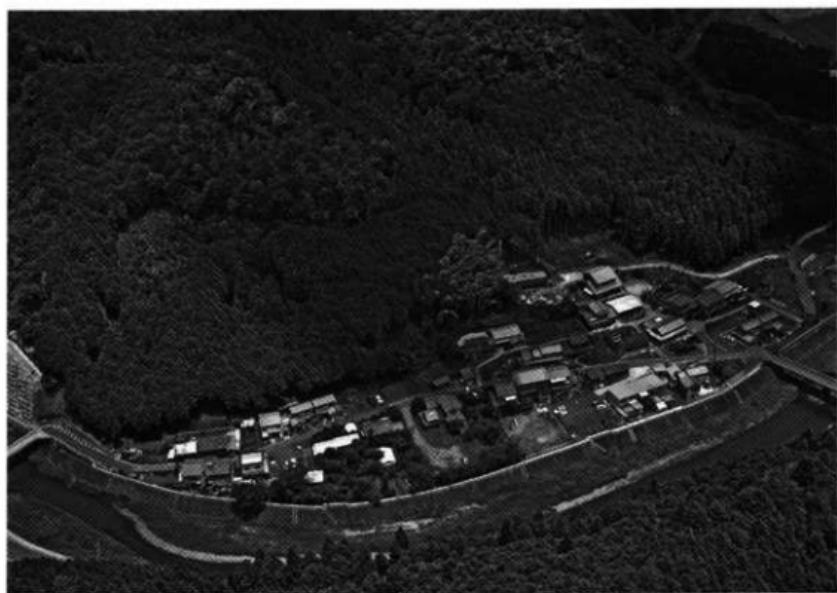
5 抄 錄

遺跡名	下城・馬場遺跡（奈良県遺跡地図番号15-D-90）
調査地	奈良県宇陀市樅原区浜1295番地（小字名：下城）
遺跡立地	標高約339m～370mの尾根稜線・斜面、谷部分
遺跡規模	南北：約200m、東西：約200m
種別	縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物散布地、中世の居館跡
調査主体	樅原町教育委員会（現 宇陀市教育委員会）
調査担当者	樅原町教育委員会 生涯学習課（現 宇陀市教育委員会 社会教育課） 主任 柳澤一宏
調査原因	個人の農地造成工事（事業主体：砥出嘉信）
現地調査期間	2005年（平成17年）7月21日～2006年（平成18年）3月28日
調査面積	62m ²
検出遺構	整地土
検出遺物	須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、青磁、白磁、鉄刀子、鉄釘、鉄滓、 銭貨、碁石他
資料等の保管	宇陀市教育委員会
調査後の措置	発掘調査継続



写真8 下城・馬場遺跡8次調査

図 版

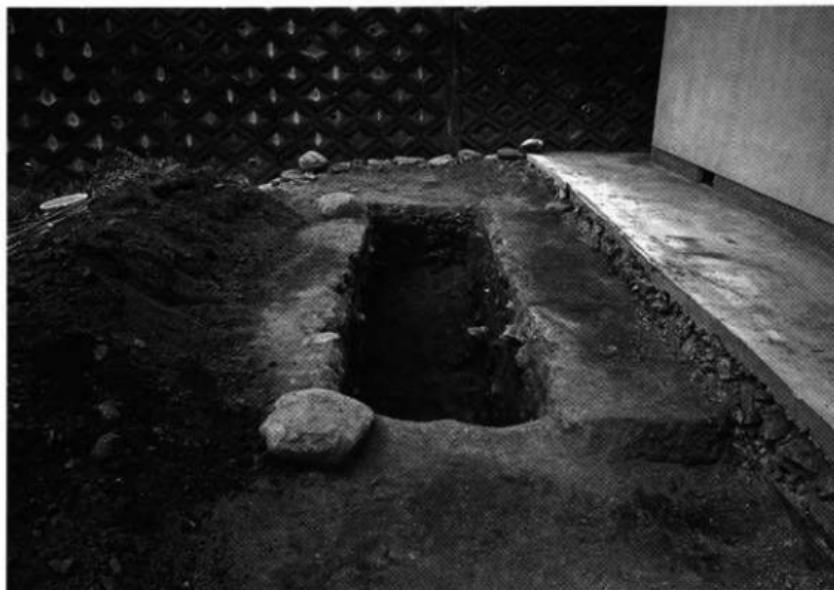


航空写真（南西上空から）



航空写真（北西上空から）

図版二 檜牧高倉遺跡



調査地（南から）



調査地（南西から）



調査地全景（南東から）



調査地近景（北東から）

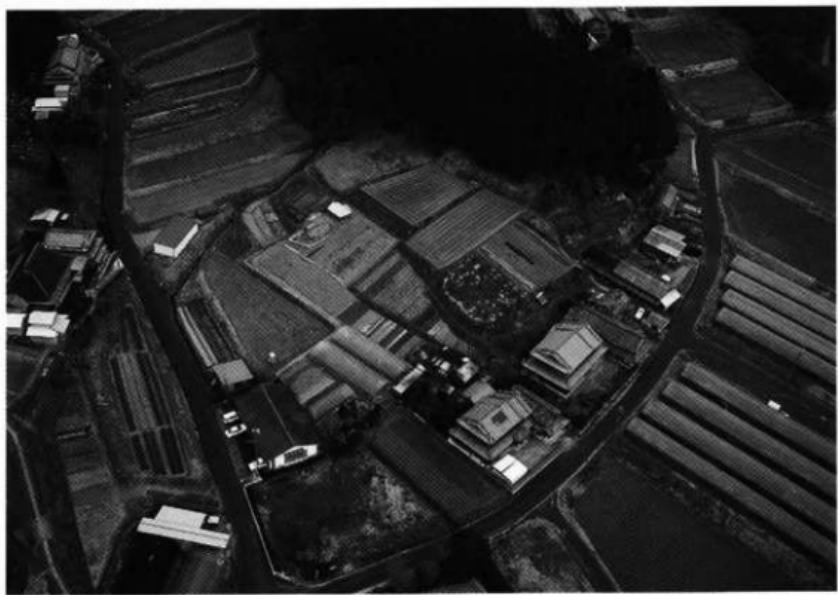
図版四
福地所在遺跡



調査地西半（東から）



調査地西半土層断面（北から）



航空写真（南西上空から）



整地土<第3層>内遺物出土状況（西から）



整地土<第3層>内遺物出土状況（南西から）



整地土<第3層>内遺物出土状況（西から）

報告書抄録

ふりがな	うだしないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2005年度							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宇陀市文化財調査概要							
シリーズ番号	1							
編著者名	柳澤一宏							
編集機関	宇陀市教育委員会							
所在地	〒633-0292 奈良県宇陀市桜原区下井足17番地の3 TEL 0745-82-5739(代)							
発行年月日	西暦 2007年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	世界地図系				
検査高倉遺跡 (1次調査)	奈良県宇陀市桜原区 検査2159番地		29212-5	34度 31分 41秒	135度 58分 11秒	2005/6/8 ~ 2005/7/7	4	個人宅地 造成工事
福地所在遺跡 (1次調査)	奈良県宇陀市桜原区 福地777、778-1番地		29212-5	34度 32分 03秒	135度 57分 42秒	2006/2/17 2006/3/28	12	個人住宅 建設工事
下城・馬場遺跡 (11次調査)	奈良県宇陀市桜原区 沢1295番地		29212-5	34度 29分 33秒	135度 58分 07秒	2005/7/21 ~ 2006/3/28	62	個人農地 改良工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
検査高倉遺跡 (1次調査)	遺物散布地	縄文、古墳、中世、近世	なし	石器、碧玉片、須恵器、瓦器、土師器、陶器、磁器、土製品、鉄釘				
福地所在遺跡 (1次調査)	遺物散布地	弥生、中世	なし	なし				
下城・馬場遺跡 (11次調査)	遺物散布地 城館跡	縄文～古墳、中世 中世	整地	須恵器、土師器、瓦器、丸窓土器、陶器、磁器、青磁、白磁、鍔刀子、鐵釘、鍼津、銭貨、基石他				

宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2005年度

宇陀市文化財調査概要 1

2007年3月30日 発行

編集 宇陀市教育委員会
発行 奈良県宇陀市株原区下井足17番地の3

印刷 株式会社明新社
奈良市南京終町3丁目464番地